新羅に遣はさるる使人等、別れを悲しびて贈答し、及海路に情を慟ましめて思ひを陳べ、幷せて所に当たりて誦ふ古歌

贈答の歌十一首（三五七八～三五八八）

秦間満の歌一首（三五八九）

慥しく私家に還りて思ひを陳ぶる歌一首（三五九〇）

発つに臨む時に作る歌三首（三五九一～三五九三）

舟に乗りて海に入り、路の上にして作る歌八首（三五九四～三六〇一）

所に当りて誦詠する古歌九首（三六〇二～三六一〇）

七夕の歌一首（三六一一）

備後国水調郡の長井の浦に舟泊まりする夜に作る歌三首（三六一二～三六一四）

風速の浦に舟泊まりする夜に作る歌二首（三六一五～三六一六）

安芸国の長門の島にして磯辺に舟泊まりして作る歌五首（三六一七～三六二一）

長門の浦より舟出する夜に、月の光を仰ぎ観て作る歌三首（三六二二～三六二四）

古き挽歌一首 幷せて短歌（三六二五～三六二六）

物に属けて思ひを発す歌一首 幷せて短歌（三六二七～三六二九）

周防国玖河郡の麻里布の浦を行く時に作る歌八首（三六三〇～三六三七）

大島の鳴門を過ぎて再宿を経ぬる後に、追ひて作る歌二首（三六三八～三六三九）

熊毛の浦に舟泊まりする夜に作る歌四首（三六四〇～三六四三）

佐婆の海中にして忽ちに逆風に遭ひ、漲へる浪に漂流す。宿経て後に、幸に順風を得、豊前国下毛郡の分間の浦に到り着く、ここに艱難を追ひて怛び、悽愴して作る歌八首（三六四四～三六五一）

筑紫館に至りて、本郷を遥かに望み悽愴して作る歌四首（三六五二～三六五五）

七夕に天漢を仰ぎ観て、各所思を陳べて作る歌三首（三六五六～三六五八）

海辺に月を望みて作る歌九首（三六五九～三六六七）

筑前国志麻郡の韓亭に至り、舟泊まりして三日を経ぬ。時に夜月の光、皎皎に流照す。奄くこの華に対し、旅情悽噎す。各心緒を陳べ、聊かに裁る歌六首（三六六八～三六七三）

引津の亭に舟泊まりして作る歌七首（三六七四～三六八〇）

肥前国松浦郡の柏島の亭に舟泊まりする夜に、遥かに海浪を望み、各旅の心を慟みて作る歌七首（三六八一～三六八七）

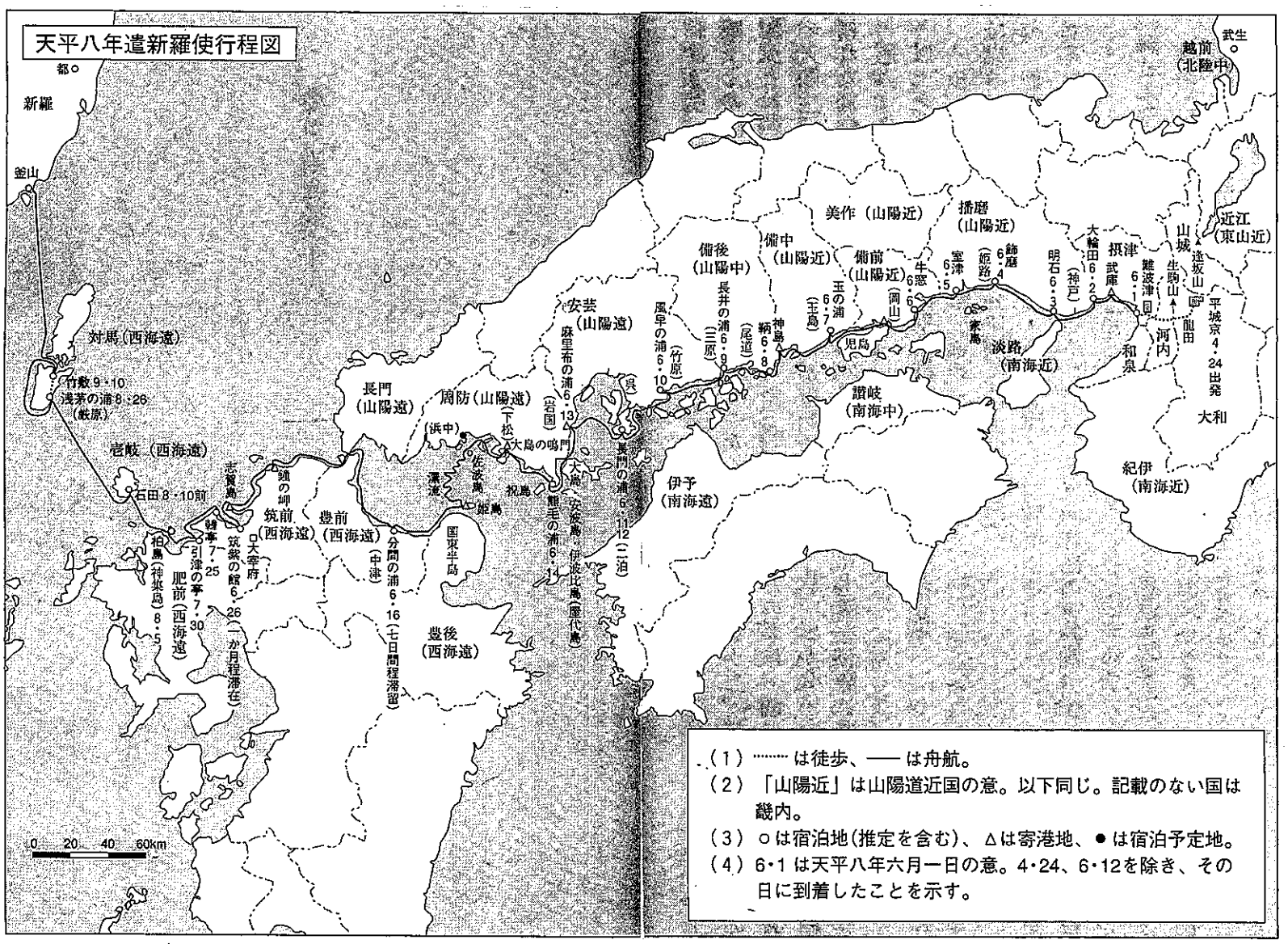
壱岐島に至りて、雪連宅満の忽ちに鬼病に遇ひて死去りし時に作る歌一首 幷せて短歌（三六八八～三六九〇）

葛井連子老の作る挽歌三首（三六九一～三六九三）

六鯖の作る挽歌三首（三六九四～三六九六）

対馬嶋の浅茅の浦に到り舟泊まりする時に、順風を得ずて、経停すること五箇日なり。ここに物華を瞻望し、各慟心を陳べて作る歌三首（三六九七～三六九九）

竹敞の浦に舟泊まりする時に、各心緒を陳べて作る歌十八首（三七〇〇～三七一七）

筑紫を廻り来て、海路より京に入らむとし、播磨国の家島に至りし時に作る歌五首（三七一八～三七二二）

伊藤博『萬葉集釋注 八』（集英社・一九九八年）より